九宮の

十六

歌也詞を名とする

Murasaki Shikibu

[v. 21]

[Kyoto, 1654]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 21
copy 1
Asian
Japan
Lage

2004551302

源氏廿二戈の三月より廿四ノ十月まで

年かへりて宮の御たてもゆゑ（若ヲガノ諒闇ヲ）ぬれば世中をあら
たまりて、（四月ノ）ころもがへの御ぞなどもいみめしき紙。
ましてまつりのころ（加茂ノ）はおほうたのそらのそしき
心ちよげなるに、前（摧）所院をつれぐとしたまが絶ぬ
まへなるかつらのしたる風なりけしきまつけても。
ひきへどはおもひ出ることどもあるを、（泛）大殿よりも
みそぎの日はいつるのどうまおぼさるんと、こふ
らひ（ふ）こゝろしきをあへり。かふ者
（添）かけそやは川瀬の波も立へり。志ぞこそこゝの
かぢのやつれを、むらさ紀のみそぎすくよう
に、殿の前まつけたまへり。（摧ん）おりのあそれなれば

れうへりあり

槿 かぢ夜きしは嗚目とせふまはそふはこそぎの
せまうそう世を。ちうるくとぞうりあるを。れいたい
れめとぞめもてこおりす。れぶくるをしの程などまも。
槿ノ女ぞう
さんじのもとは。前をきまでおぼしやれること
ぞあるを。院はこぐるしきことはおもほしのおへど。
槿ノ歌院と云へ
宣旨ハ地へ
おりしやうはしきだめるれふこなどれあらば
こそ。さくも罪しうへさめ。そしばもおほやけざ海乃
おりしのれとふしひなどは。きこえなるしもて。
いとまめやかなれが。いかばいきてしもまぎらりすべ
うんと。もてりぐふべし。女の家のれうへまも

やうにありすぐさず罪(ほノ)しのへがいと(女ハん)衣にはほ恵。
昨日そふのちごとせしをくおとなびてさふしひ
給ことかたちのいともさうしなるにそへて心さへ
こそ人にはことにおひいでのへれと。ほめきこえ給
とげうき人ごゝはつしひきこゝも。(撞)こゝるこゝもこゝい(女ハノ)先ん
志のふありは。(詞)このおとゝ(漢)のくねんごろにきこえ
給めりをちまゝいまとうじめたるは心ざしありも
あしずこ(桃園)家もすぢ(撞ノ)ことに女のてえこそまつり給
とぬなげきとしのてはせひたちしことをおか
がちにまてとなれ給しことなどの給いでいく。
くやしげにこそ覚したりしありくありしが

されど故（左大臣）大殿の娘（妻）ざさまれきられしかざりも。
三宮（大宮の）の心給ふんことのいとあしさり。さかくこと
みんさきゆることもなりしなり。今はそのやんごと
なくえさしぬすぢまてまれきられし人さへなく
なられしかばげになどてかはさやうにておりを
ましもおしかしましとうちあげ給ふにぞ。さら
ぐりてかくねんごろにきこえし給もさるべきにも
あらんとなん心給ふるどいとうごいにきこえしぬ。
（撞心）うろつきなしとあげして。（祠）（桃園）お家にもしかうろ
ごとにきれにせられてまつりてすぎ給ふしを今
さしに又世になびき給ふんもいとつきなきことに

なんと思ひまして、さづくしげなるれなしきなれども、志（女ナリ）
ぬてもえきこしをもむけ給ひず、家人（撞ノ女ゴトノガ）もかうしも
これ心かけ思ひしこれども、世中（撞ノム）いとうしろめたくのこ
ほぼさるれども、かれ（地）は身（添）づくしは、けが心をけらし、哀
をこゝえきこゝして、人のれなしきのうちもゆるがんは
どおせこそ待ひたりぬへ、さやうにあれがちなるさ後
まれ心やぶりきこゝえんなどはほぼさげるべし、大変
がらのつぎ（タ十二キ之）ぬのれ元服（ゲンかく）のことほぼしいそぐを、二条
院にてとおぼをど、大家のいとゆかしげに思ひし
ようもことゝりに心ぐるしかれがるをやがて（三条）の変
にてをきをなり給、右（訪）ぢ殿をもしめ思ひて、れとぢ

のとれぞしこれ上ぜ道のやむごとなきれ御ぼえ
ことまてのこゝもれしこまへがおろじがこゝろも
けれもくとさるべきことゞも、さるべくまけりう
まつり給ひ御ほうる世ゆすりて面をきれいそぎ志
いさほひなり。四位(タケと)まなしてんと思(源ノ)し世の人もさぞ
あらんと御もへ家を、まゝ(タノ)ゞいとさびいなる御ぼを我(源ノ)
心まゝをさる世まて、しかゆくりかなすらんも、
中々めなれさることなりと御ぼしとゞめけ。おさ(タノ)
ぞまて更ゞりうへ家を給ひ、大宮もあるぞおさ
ましきことゝ御ぼしこゝろぞことゝりまいとおし
りけり。れ(大宮)こいめんありて、この(羽タノヨリ)ことゝきて給ひ

[illegible]今かうあれがちはしも。まぐさきまとひけるを
まじうなれど。しかやうなれて。だ学のほまじぐし
ならはさむのほいなるまより。いま二三年をいて
づくのとしまもなしてをれづくあほやけまも
けうまつりぬべき程まもならば。今ひとくなり侍
なん。才づくはこくのへのうちまあひいで侍て。
世中のありさ風もしり侍らず。よりひる此前り
さかくひて。ひづくまなんとうきまなどもなら
ひ侍し。こぐうしこきれてよりつくへ侍しごまなる
ごともひろき心をしらぬほどは。文才まもしぶまも。
ことゆえのしらべまもねくらず。とまぐらぬ所の

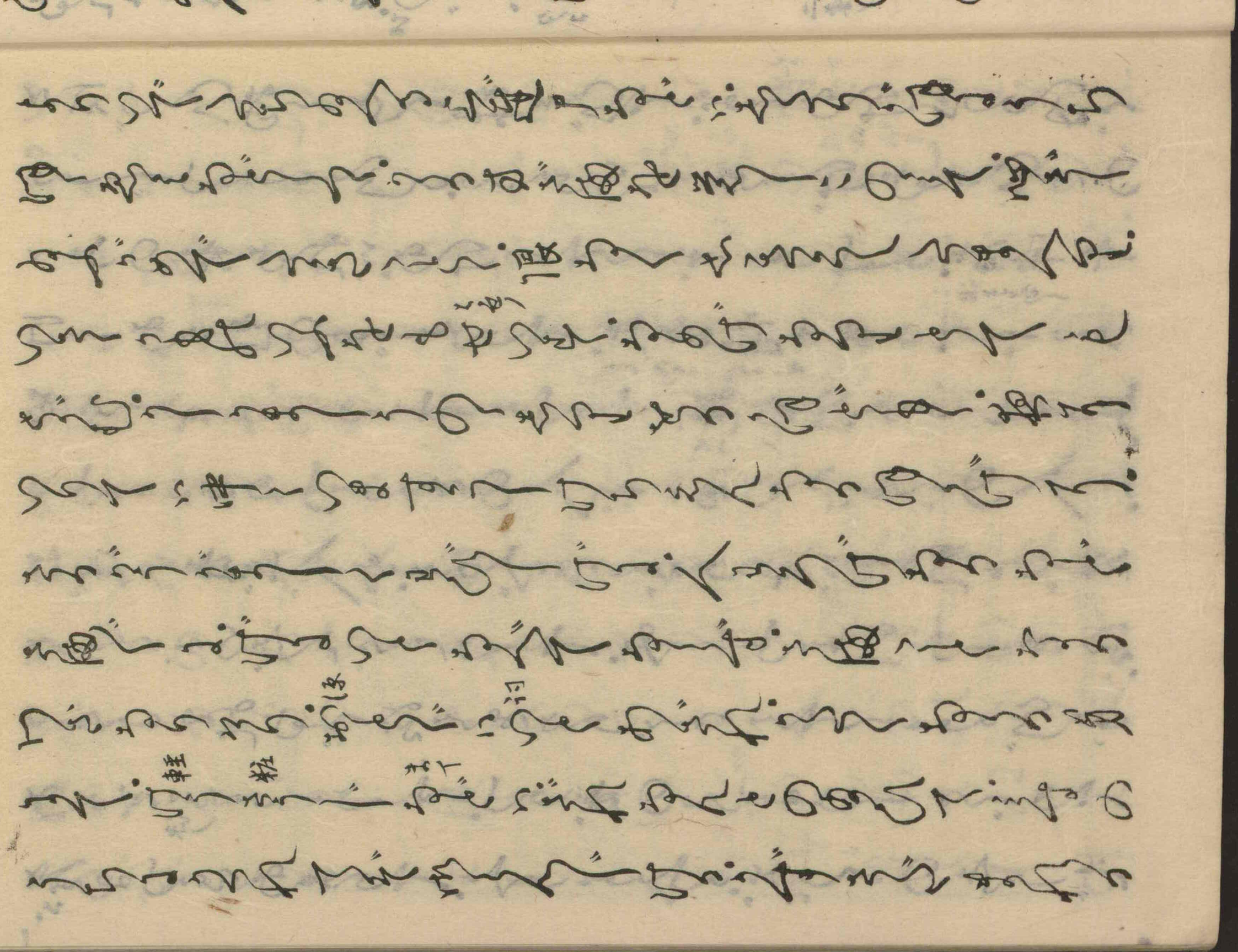
おほくなん侍けるゝ。ちゝ和さ御やまうしこゝろ此
まさるゝあしはいとうたきことまなん侍れば。ま
してひぎくつゝさりけゝ。べゞるゝゆゑん御ど
の。ゆくさきいとうしろめたきまよりなん。おふ御人
をさて侍る。こゝろさ歟のみとして。けきかうかり
心まうなひ。世中ぢりまをぞりなしひぬれば。がく
もんなどは才をくらしめんことは。いとさをくなん
おほゆべかめ。こゝろふれあそびをこのみて。心乃
まゝなる皮(ふん)爵(しやく)はのぼりぬれば。とさまをこふ
世の人の。しるこはたれまじろきをしつ。けいせう
しゞしさきりつしるゝ。ふほどはたれづゝ人と

あげてやんごとなきやうなれど、ときうつりさる
べき人ならをられて世おとろふるすゑにハ、人に
うめあれづらなるに、かゝるに所なきことなるん
侍れざえをもとしてこそやまとむしゐの世に
もちひらるゝもつよう侍しめさしあらりてハ
心もとなきやうに侍りともつゐの世のをもしと
なるべき心をきてをなしひなば侍らず女なん後も
うしろやすうべきよりなん、さゞ今いくらぐ
しかぞなるしも、かくてくぐこ侍しば、せまつも
こうだ学のしうとて、けしひあれづらひともよりも
侍しじと、とふゐふるなどさそしたしをゐへぞ打

ちげきゆて。けよくもおぼしよるべくなけなを。
此ぢね(ぢね)などもおまりひきこぶへこれことありと。
うこふき給めるを。このおさ(タ)れごこちるもいとくち
めしく。ぢね(ぢね)左衛(ねノオ)門の子どもなどを。我よりハ下(げ)
らうとしおとしこりしごこ。これをのくくい
しれぼりつ。およすけあへなり。おさ(タノ)ぞをいと
くしとしられこるが。心ぐるしうしくるありと
きてゆへぞ。うちひ(添)ひのて。いと(詞)およすけても恨(うしゅ)
給なりなり。いとしくるしやこの人(タ)のほどよとて。
いとうけくしとおぼしこり。学(ぐん)問などして。すこし
物のこころまえ給ふに。それ恨ハをのづしとけ給

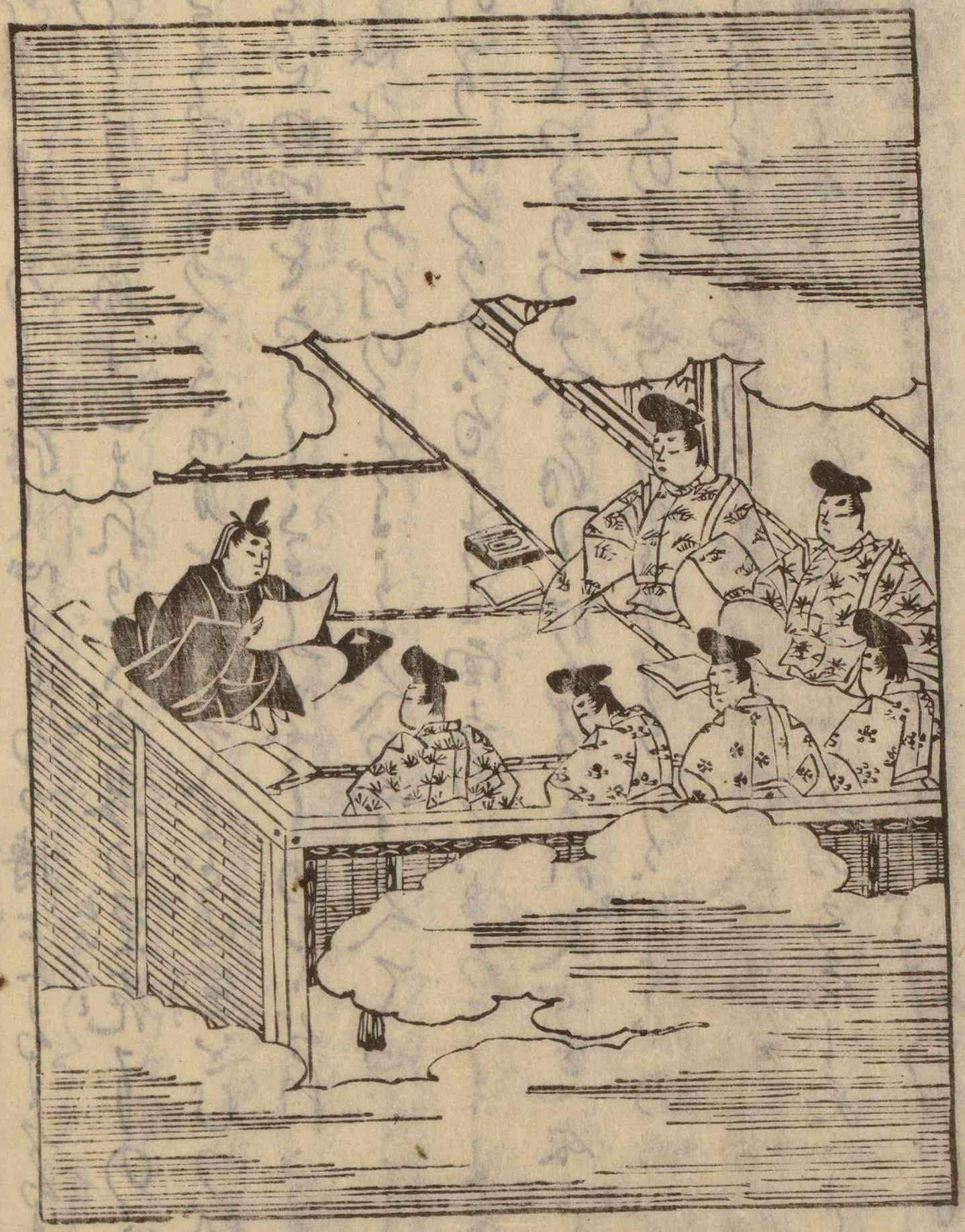
なんときこえ給。おぎなり(タヨ)いろことにひんぐしの(二条ノ)院に
てし給。ひんぐしのこひをしつしられたり。上達ア
殿上人。めづらしくいぶしきことにして。我も我もと
いどひ来りぬへりもちをどもし中になくしぬべし。(添詞)おぐ
うる所なく。例わらんにまうきて。なぶむることなく。さ
びしうをこなへとおほをぬへば。(たちせん)しぬてつれなくせな
して。家よりかにもとめたうさうぞくどもれうちあ
ぜかたくなしきすぐるなどをもたちなく。おもしち。
こはづひむべくしくもてなして。座(ざ)につきなしび
たうさほうよりもじめ。こもしぬさ海どもなり。つきさ
しぐちにえたへずほうしまれぬ。さうに抱けひなどして

まじく。すぐして。しげまれる。很をとゝえりいぐし
てべいじなどもさしをぬへれど。すぢことなりけるま
ぢしひまて。広大ね。民なるなどの。おほれくまたけ
たりぬへるを。おさましうとぶめしてあろす。おほし
ひ(恒)もと(下)あるじ(主)。されたぶひざる(非常)ゆりたうぶ。く
ぐりのしるしとあるなるがしとしずしてや。
おほやけはいつうまつりぬふ。されたぶをこなりなど
いつる。人ぐこれほとろびてけしひぬれば。又なり(久臣河)(略)(高)
りしなり(略)やまん(止)。されたぶひざうなり。座(ざ)をひさて
たちたうびなんなど。ぞどしいふもいとおしこなる
ひぬしぬ人ぐいぬぐしくけうありとせひ。このこち(学者ノ事)



座(ざ)につきあまりて、ぐりまうづる。だがくのしうだ
あるをさうしめして、つり殿のうるめしとじめて
ことるまれなど給ふをかりことしてしまうげ事
ちうを、さいだんどもめして、又しゆゑけらしを給。
上達ア殿上人もさるべきかぎりをば、これとじ先
さゝらいをぬふ。もうをの人ぐい回ゐん。こゞの人も。
おとゞなさしめしてまつりて、絶句(ぜつく)けりしまふ。
けうある題のまじえりて、文章博士(もんじう)なるこじかさ
ころの衆なれば、おけもてしぞうずる。右中弁(誰ともなし)
ううじつうまけるかうちいしきまげなるひとの
こはづらひ抱しきく神さびて、よそおげしうるほど

いとおもしろし。おぼし心ことなる博士たちまたは
タノ
うたうきあるひまれなりて。世界の菓花りのこ
えふれなふべきの月をもちて。まどの蛍をむつび。
えざの雪をなしこまふ。心ぎしのとぐれたる
さ風を。よろげのことまふへなずしへて。心ぐり
けりあつめたる。旬ごとる面をろく。もろうしまも
まてけり。つたへまほしげなるよれ文ども。女と
なん。そのころ世まめでゆすりける。おとぐの所を詩
ぐさしなり。おやめさ衣なることさへすぐれたる後。
周おとしてどじさはざしうど。女のえしらぬこと
まのぶはよく。さことをとうえてあれば。もしし所



うちつゞき（タを）、りうがくといふことは、きさせまして、や
がて（東院）ての院の内にはざうしいりて、まめやうに
ざえかうき師にあづけまひてぞ、学問をさせなり
給ける。大宮のはもとまも、おさくまうで給ひず。
（大宮ノ）よるひるうけくしこて、おをちご（タを）のやうにのこまて
なしきこしめへれど、（源ん地）うしこまていえまれなしひ
給ひとて、しげまる所にこめなりめへるなりけり。
一月にこうびだうりをまつりめへとぞ、ゆれし
きこしめひける。（タム）いとこまりねめひて、いづせこさま
まるとれ（源）をいしくもおもしますれ、くくるし
うしでも、うきくねにのぼり、せるまちねしく

人はなくやはあると。ちひきそしめへど。おほかるの人
がらまめやうに。おぼめきたる事なくおもすれば
いとよくねんじて。いでさるべきふぞとくよこ
とてく。まじらひもし。世にもいでたんとちひて。
こゝ四五月のうちに。史記(をき)などいふ文は。よこもて
ゆてがり。いまはれうし(深心)(寮試)。うけさきんとて。まづ紙は
まへまて心うきさき給。れいの大(は)ね。左大弁(は三人誰ともなし)或部大輔。
左中弁。などだうりして。は師の大内記(あいき)とめして。
史記のうきまきくれうしうけんに。たうきを乃
人さしべきふしぐとひきいでく。ひとはたりよ
まさ生り給に。いたし(タリ)ぬ人面なく。うらぐにうよ

もしよそのみへるさ夜つまぢりしのうらぞ。あさ夜
しきまぞ。きぐるくれば。さりべきまこそおもし
くれとこれもく洞かとしのふ。大ねはましてお（左大臣）
とぐおもをましくばとさそしいでくなさのふ。夜も
元心づよりまてなし給ひず。人のうへまてくれ
ありとこ字侍しを。このかとなづるまおやのうら
りもりきれゆくことは。いくぢくなるぬ。散ながらかる
世まこそ侍くれなどのなて。そしのぐひ給をまる。此師
の心ちうれしくめいぼくありとこへり。大ねさか
づきさしのへが。いくさ（大内記）しきいしねてをるかほりき。
いとやをく也。世のひがもれまて。ざえの程よりは

もちゐられずどげなくて身まづしくなんきけるを
れ(ほノ)らんじこゝ家所ありて、かくとりつきめしよを
こゝろなりけり。身(大内記ん)はあまりまでれんりこを給りて、び
さ(タ)ゝのれとくにこゝちまちに身をかへこゝろとおも
へば。ましてゆくさきはなしぶべきんなきれおぼしぞ
あんしし。ぢ(タノ)学にまいり給日ハ。れう(寮)もん(門)にぜ
アのれゝる夜どもかずしらずのどひこゝろもおほか
こゝ世にのこりこゝろへあしじとこしこゝろに。又なく
もてかしづれてづくろもれいり給へるゝ。ゝもぞれ
志(タ)のれさ夜。げにかゝるまじらひにはこしずあてに
うろしげなり。例のあやしきさ抱どものこちまぢり

つゝきねたる。座(ざ)のすゑをかしこしと。ぬぼ(タク)すぞいと
ことなりあるや。こゝまてもまゝかろしのゝしる物
どもありて。めざ面しきれど。ずうし(タク)もおくまぞ
よこまて給つ。むかしぬぼ(タク)てだ学のさゝゆゝろ
なれば。上なる志も此人。げれもくと此君は心ざし
あつまれば。いよく世中にざえありぬかぐ志る
人ぬぼくなんありける。文人(ぶんぶん)ざえうなどいふなる
ことゞもよりうちもじめ。すかく志うしまてゐ人
れば。ひとへにこゝろにいれて。師(し)も弟子(でし)もいとゞ
まげましぬふ。(涼)我にも文(ふん)ぶりしげく。博士(はくせ)女人(さいぶん)
どもあえたり。すべてなまごとにつけても。君この

ざえの程あらはるゝ世にあるん有けるかくて（そきあさ）后升
ねつべきなれ。新宮の女御なれはなくて（は夏本）母宮もはうしろこと
ゆづり男に給ひしかばとおとゞもことづけ給。源氏乃
うちしきり后にあるべきなれ。世の人ゆるし男にず。
弘（はゝ娘）厳殿の先（まづ）人よりさきに来給ましもいづるなど
うらくにこゝろるゝなるゝに心をも男ゆる人ぐおぼ
つゝなづりきこゝ。（紫ノ又）兵部の宮と男にし。今も或るに
にて。此御時にはましてやむごとなきは笑くにて
おもしすれ（冷泉院女御）むすめ。ほいありて来なり。おなじごと
王女御（ロうねうご）にてさふらひ給ひ。おなじくは（右つぼ）御母なくにて。
きらしくおりすべきなくして。母（右つぼ）后のおりしまさぬ

れうたりのうしろこまとことをて。ま川うたし
うるべくと。とりぐまおぼしあらそひこれど。る紙
秋茶瓶にあり給秋好ノ中宮と云り
梅つぼねまひぬ。れさいもいのくひきうへまぐれ
のへりけるを。世人おどろき男も。おとぐ太政だ臣ま
あがりまて。大内内だ臣まありまぬ。世中のことだ
まつりごちまべく。ゆづりそそら給。人がらいとすく
よりまさらくしうて。心もちねなどもりしうく
抱しまふ。学問をしてしまぬひかれば。ねんふつざ
まはまけまひしかど。おほやけどまりしこく
なん。ちらぐまれ子ども十余人。おとなびけしもれ
志まふもつざくまありいでつ。をとらずさうへさう

此家のうちなり。女ハ女此（こきでん）と今一所（雲刀のかり）となむおもし
けり。ひるむど絶りがしまて。おてなるすぢもをとる
まじかれど。その母忘（雲刀ともるし）掃家の大納言（雲刀ノまかつぬこ）の北方に成て。
きしむかひ。こゝろ子どものかぎ。おほくなりて。それ（はん）に
おもて後のおやにゆづらんいとあいなしとて
とりもちなら罪しなて。大家にぞあづけ罪なんり
けり。女此（こきでん）にはいとこゝろくおもひおとしきこえ
なへれど。人（雲刀）がらうちなどいとうけくしうぞ
おりしこゝろ。くるぎれ忘（タ）ひとけまておひいでなひし
かど。そのくナにあまりなひて後ハ此すことにて。
むつましき人なれど。おのこゝにはうちとくまじき

抱ありとぢくおとゞこそしなひてけどをくありま
うをおされ（タハ）心ちまもふとちまさしあれば
ちうまき茶紅葉はつけてもひねなあそびのつね
せうともねんごろまつもれありきて心ざしを
こしきてしぬへぞいうじ（雲ぬん）うもひかもしてけざやう
まは今ももちこそて浴もぎれうしろこどもく何かに
けうきれ心どちなれバせしばこゝなひこまへ分れ
あまひを俄（ハカ）まもいりぐハもてもなれもしこゝなめ
ぬんとうろは女（雲ぬ十四戈）ぞ（地）そてなまぐろなくなさなく
おもすれどおとゝは（タ十二戈）さてそもれげなきほどくん
こそもれおほけなくいうなれなしひまかるくん

夕ム
よそ〱にありてはなれぬぞしげ心あるべきに。
地
まだかゝるおもひあつてのおもひさへふかくなりまさりて。
かきかくしつまるくるかくどもの心おされなくて。ぞの
づらなちゞみかりあかを晴るゝの人もはなぐ
志れつもありけれど。なほはくこそと往みもさ
こそれ。ことつゝあるべし。源氏の大将どもく
もそく世中の人のそざまなく。のどやかなるぬる
よる時ならちもそ。萩のうは風もなくなしめ夕暮は
おぼのれなる。池のかゞ氣なひて。姫君らうし
こゝえのひて。ほしとあまくひくそとめりぬなつ。やれ
よる河の池のよとめよ思ひすれども。いづれも河へ

まりぬふ。びいとそ女のしたるにまくまやうなれど。
らかくしき物に侍れ。今の世にまことしう
つゝへたる人。おきく侍らずなりにたり。ゆのこと。
これの源氏などかぞへ申ひて。女のなりにはおほ
きおとゞの山里にまゐる人。そいとぶ。と
まゐれ。ものゝぶ。此後には侍れど。来るなりて。
山がけにてさしへたる人。いでさしもひきしてぐれ
けん。かれおとゞいと心とまとそしひての給おほ
ゆり侍れ。こと事よりはおそびのるのざしは。粗
ひろうあるを。かれこれまかよりし侍るとそうしこ
れ。ひとりごとにて。ぶとなりけんとそめげら

しきこしあれどのうそ・ゑまそべのし男かし給
へど・（次官）おうさみすしとしうおくしもありまるやと
ののへど・かうもおもうひきぬふ・さ（明石ノ）いもひたりうち
そへて・我おやまうめでたりけり人あるや・か（源ノ）うひの乃
世のおぼへはへらぬ女でさまりけきをもありてあるは
きへてもやりしねくまず・や（紫）んごとなきにゆづれる
ころをさそて・ごともあるべき人（明石）ありとぞ思ひ給へど・
う州細殿男のみ・女（弘徽）御は母どころなきをよりこそ・世は
まちわびしかくもみるは侍るなれば・人の上の絵ぞ・女（つきしづく）
御のおぼすをけむりのおしずあまざしも今はとどりて・いかひ
紫ぞうしともひめの人しうど・たまぬ人（秋好）はあそれ

ぬりすくさるなん。せいせひの外なる物とせひ待
ぬり。此君（雪井）をぶるいりで。おもふさ海ようなし待ん。
其実の御元服（ぐんぶく）ぐ今のことになりぬるをとく。人
きれずせひ女人心ざしうるを。うういふさいまい人（ぬれ）
のちらの。名が子とそまるおひせがひぬれ。立出給
へんは。ましてきしろふ人ありがたくやと。うち
なげきの人が。ちなどうさしもあらんでの家なりさう
すぢの人いでもおしし給まで。やむやうあらじと。
故おとゞ（左大臣）のせひなて。女御（きさぞん）のれことをもなるちいそぎ
給し物を。おもきましうばかくもてひが無ること
もなりましなど。此御とまてぞ。得きおとゞ（係）を

うらめしげまさひ罪しなへる。娘(雲井)君のれさ海のいと
さびしなうつくしうて。さうのれとひきなふ紙。
れぐしのさがりだし。うんざしなどのあてまなまめかし
さ紙。うち(ゆ)海もりなへば。たぢ(雲井ノ)らひてすらしそだあ
なへる。かさもしめつらいきういくしげまて。とりゆの
ていきいとじう。いくりたるものゝ心ちするを。気(大宮ん)を
限(かぎり)なくかなしとおぼしたり。かさあまをなどひさ
しさひなひて。としやまのいおとゞ和琴(ヨごん)ひきよを
なひて。まちのしらべの中にいまめきたるを。さう
ざ(ば)のえざれて。いひきなへるいとおもしろし。
かまへの梢(こずゑ)はろくとのうちぬり。おひどうち泪

おとしのくなどそくりしてのは車のうしろは
りしら紙のどへたり風(詞)のちからなどしすくなしと
打ぜどなて。さんのみなしねど。おやきく抱衣なり
夕かれ。れあそぞさんやとて。秋風(しうふう)来(らく)まうさ合て。
さうがき給へる声いとおもし給かれば。これさ海
ざ面おとぐをもいとうのくしとしひとさし給ま。
いとぐそへんとうやあらん。全ざれ君(夕)まいりなへり。
しるるまとて此車(雲ゐノ)へぐそくいれそまつりなへり。
おさく(詞)對面(こゝめん)もえ給ちぬかれ。すぐうくて志浩
学問のあるがちなしん。ざえの程よりあまりぬるも。
あぢさなさいぐと。おとぐも(源)おぼしきれること

ありなどをくをきてきそしおふやうあくんとはさふ
おへあがらかうこまりおはすることあん。こころぐるか
しつう待ると笑しおて。時ぐいことつぎしうまへ。
笛(ふえ)の音(ね)まもふることいつこもろ物也とて。此笛なり給。
いと(タノ)つうおしげあるまふきていらじう
おもしろかれば。此(琴)とぐもなばしだしとぐめて。
おとぐい栢子(ひやうし)おどろくしうしず。うちあるし
おひて。萩が茶ぎりあどうひおふ。大夫(詞源)もかやうの
此あそびま心とぐめおて。いそがしきれまつ里ごと
どもなば。のがれ給ありかり。げまあぢきあるき世ま。
心のりつぎ給してこそ。あし給あまほしかれあど

のなて。れ(地)うちしけまつり給ま。くらうなれば。おほと
なぶし。まり。れゆづけくぶ。柚などこれもくさくし
めす。ひ(雲ぬ)めぎ。いあなくまつしまりなひ川。しねて
けどをくもてなしぬひ。れ琴のひびりをもさうを
なしじと。いまはこゝなく滿(へぎて)てきてなふを。いと
おしきことありぬべき世なるまことぞ。ちうつう
まつる。大文のれうこのねびべどもさくめきなり。
おとゞ(れ)出給ぬるやうにて。思びて人は柚のなふとて
立ぬへりけるを。やをしらいほそりて出ぬふちま。
うるさくめきごとをするま。おや(ほん)しうなりなて。
れこゝとゞめなへば。ひがれう人をぞいふ。(大文ノ女ぞうほ)しこが

ゆきまへど。人のおやよ。なれげうしおれうること
よそいでくべかめれ。子をしるはといふ。そしごとか
めりなどぞつきしろふ。おさましくもあれ。されば
よしひらぬことはあらねど。いとけなきほどは
うちうちにて。世いうき物にもあけるれと。氣久を
つぶくと心えぬ人ど。者もまで出ぬ。ゆき紀をふ
声のつめしきまぞ。夜ハ今こそいでさせうまひ
れ。いづれのら海におもしましけん。今さへ
うりあぐけごとぞといひあへり。さくめきごとの
人ぐいいとうぢしき番のうちそよめき出つるハ。
ひとざれ君のおりしましつるとこそしひつれおれ

むくろけや。しりうごとやほのきうしめしけんゆづりしきれ心をとと偶あへり。殿(ばん)にうちすぐらはぼまるいとくちおしくあしきことにはあるぞ。めづしげるきあらひに。世の人もさひいふべきことおとぐのしぬて。女(ていさでん)のれをとしさづめぬふをつくるに。けくらまるに人にまさうこともやとこそさひつれ。ねくくもあうるとおぼして。殿(ほとばと)の中(地)の大きなは芳も今もいとよくおりしなぐらやうの方にていいどこ罪ぬひし名称も見し出て。心うければ。孫兄がちにてあらし給。大(ばん)家もさやう乃気女にはんずんぬを。せるなくうしうしぬふ

はむかしまでまうでて給ふらんと人々のおもひし
気色などの御しうれしとおぼすには心ぐるしくて。
此
すこしおくしくあざやぎたるころほどさだめ
がくし。二日ばかりありて。江大宰へ参りめり。さらには参り給
時に大宰ものとは心ゆるされしこのきはにおぼいたり。
はあまびさいおつくろひ。かゝりしきはそうらへ
かくしなりそへて。かずかずもいづしげにおはする
ひとゞ御あはれがまし御かずぞいとなり給。ハ御とくれ
ろしきあしらそ。詞らるまさふもいとあつく人ぞ
いふまゝ給へんと心をされはいかゞしらるゝ
おほ給ふ○じ。せつは給へんくらか。はめづれざいめん

ぞれ。おぼつかなさへだてなくとそおもひおふ
れ。よりしぬものゝうへまてうしめしとおもひしさを
けぐさことのいでまうでさうをかうもしふおへ
じとかけいおもふおもふれどおもをしげめがくく
おぼし給てあんと。泪をしのごひ給ふ。大宮 宮けさうじ
おへくれかけのいろこゞひて。れ先をおぼさうり
ありぬ。詞 いやうなることてかいまさられよちひ
の事は心をさそいおぼさるんとさそし給も
れふ さすがはいとおしかれど。詞 これをしきれかげは
書カ おさなきもれはなりをさそて。男づらは中ゝおき
なくよりこゝもつず。まげめまちきまじらひ

など。さらぐ志しぬをミぬ人なげさいとなミ
けく。さりとも人となきをぬひてんと。このミけらり
侍けるよ。しきぐなることの侍れば。いと口おしう
なん。誠(まこと)よあめれ志なるぶ人なきいうそくよい
抱きゝめれど。志しきほどよ。かゝるかも人の字
しふ所もあきつけきやうになん。ほぐりの程よも
あゝぬなりしひまぐるを。外人(タ)の所ゝ絶
まもいとうるもなることなり。さしもなれきらく
志うめぐしげあるあらりよ。い面めしうまて
なきらくしそおしれ。ゆゝりむつびねぢけが
ましきき面まて。おとぐもきくおぼせ所侍なん。さる

まてもかうことなんとしたしをおひてさしかり
もてなし。すこしゆりしげあることをまぎてこそ
侍しめ。おさなき人（夕壽）ごの心にまかせて御こんじ
ちなちけりを。心うくしふ給ゆると男（大宮ノ）給も。愛（ん）にも
しり給ちぬことなれがあさましう思して。げ（羽）まかう
の給もことくりなれど。かけても此人ごのしるの心
なんしり侍しざりけり。げにいとくちおしきことに。
こしにこそまして。なげくべく侍れ。まろまにつゝ給
ぬ。をぬふにうしめしきことになん。こまりし
より。心とにしひ侍て。そこにおぼしいこし思
とをもすぐれたる面にもてなさんとこそ。ひと

たれぞせひ侍れ。抱げるき程と。心のやミまゝまどひ
て。いそぎ抱をんといせよくぬことなるん。さてもこれ
かはかうことは罪しけん。よりくぬ人のことはいきて
きはざけく御ぼしの給もあぢきなく。むなしき
ことまて。人のれ名やけがれんとの給へば。何(詞)のうき
うことまゝ侍らん。さふふめる人ども。何もミ
ゐ。もがきつゝふべかめる抱を。いとくちおしく
やもてしぼせめへるくやとてこちぬ。心(女ぢうどもん)たれる
人は。いとじういとおしくせふ。一束のきりうごとの
人ごは。まして心ちもこがひて。何るうゐ。むかし抱
がうりをしけんと。せひなげきあり。娘(妻力)恵はなる

心もなくてかしすりは。さしのぞきなんれば。いと
らうたげなりけれど面を。衣にしきり給。げうき人といひ
なぐ心おさなくもれしなひけりをしらで。いと
くく人なしくまとしひけり。まれこそまさりて
ちれかれとて。けめれとどもをさいなし給ふ。
めれとん
たこえん方なしかやうのことは限なきみどのけ
いつき娘も。なれげうしあやまつこゝあし。ひし抱袋
まもあめれど。気色をしりつゝ人。さるべきひま
までこそあらめ。これはあけられ立まじるまなて。年
比おりしましつゝを。なるまゝいたけなきけ程と。父乃
けもてなしよりさしすぐしても。隔ぬしさきんと

うちとけて。ゑしきえしつゝを。ゆとくしぐらり
よりは。けぎやうるゝれもてなしは。ゆまて仍めるは
ひうき人とてもうちまぎれぐこ。いまそやよづき
こゝ人（大なる）もおもすべかめるを。夢（夕と雲カノ）まこぐれこゝろ
おもしまさぐめれど。さしまさひよりぐるはけう
こゝ。とのがぐちなげく。（訪詞）よしもぐしゝうこと
もしさじ。くれあるまじきことなれど。心をやりて
あしぬことしぐるいひなされよ。今りこゝはつし
なりてん。（大なる）こゝやのれこゝろのいとのしきなり。そこ
こちはさりとも。いとくうれしもおもくれぐり
そんとのゆへが。（めれとん）いとおしき中にもうれしゝの話と

せひてあれいこじや大納言殿は男語もんこと紙
さへせひ得れがめでたきまてもたゝ人のすぢも
なまのめづらしきまゝ也ひめ
ぎ地ハいとおされげなるれさ夜まてよろづまゝ
どもかひあるべきまもあしもバうちなきまていかゝ
志てかいたづらまなりぬふまじきつぎすべからんと
志のびてさるべきどちのまて大宮をのゝ恨きたく
語宮ハいとくあしとおぼしと中まもおとてぶ心
はかなしさはそぐれ語まやあしんかゝる心乃あり
けりもうつくしうおぼさるゝまなさけなくこゝよ
なきことのやうまそしの語へ家をなどかさしも

あるべき事よりいかうせひつき給ふとおもひて。雲のそとく
まてしづれんともおぼしめしけるぞ。わがかく
まそなしそ先されどこそ。其家のほとりなきも
おぼしめしけれども。ちかづいてくる人の足をとを
ありけれ。只今よりみまはすべき人やいかでちかきも
き庭よりちかづいてひそかに人あり。さはくは。され
よりさてひなつかむかしとこそせんぞ。わが心
ざしのまされるものや。おもしろやうらめしうせひかな
流れ心のうちなきとかりけれ。ばなほてうらみ　恨かな
給ふらんかくさはかなんともおぼえず。なみだがれたりとよ
おそれり。一夜も人めをしげくてなからせしとも見かなぞ

あらましかば。つゆよりも哀はかなし。猶されども。ゆめの
かくおもひしらるべし。家例はぜひへもしどうち
思ひて。まちよろこび恨をあまぐちて地獄など思え
猶つのでは。悟りとまより。肉のおもひのまんじて地
し猶ありしかば。いきあんいとおもしさ。ゆうしげなき
こともしもなひその猶て。人は地おもひもきも猶川
べきが心がなしこうしとがうもえうてしどもへ。
さうころもたり猶をぞやとせんぞあんとえうて
あへば。ころはうれつとのすがあれば。ふとおもひ
よりぬ。おもそてあるまではまう侍らん。きづり
あり取りにまり侍りし後。ともくも人はまじ給

おりあけれバこゝのかべきこと侍しともあんなふ
おかつとてやとうぢしとやくりてしこそ衣は心
ぐゞしうてぢまうしいまよりざまうしいのへと
ちりまでことすまいひ有し給つゝど文あども
つまちんことのくさきあありとおのまいとらげ
り地まいりあざしのへざうまゝ京しぞわかひ
めるやうあれど心も元までゝ人さげまつ候て中
きうじをひけどれいかことまさしくめたるども
あぬを河ときうて人のなとともをずどことつばそく
尝こてざうじまうりてねのつるまれかざをも
かとさまして風の音の行す給としれてうらそな

めくまゐの鳴ひたるこゑのほのかまこゑゆかり。
おさあまさ心ちまもとりくあげしこゑなくまや雲ゐ
（雲ゐん）（同）
のかりもつぐとやとひさりごち給ひ。つかう
（先より雲ゐ原と名を付たり）
らうたげなり。いうじう心もとなければこれあけ
（夕ん）（同）
きをゆへ小侍従やさふふとのゆへど者もをず。此
（雲ゐノめはとこ）（地）
めれとごなり。粧ごとをさく給けるもそづしうて。
（雲ゐん）
あいなくれかひきいれゆへど。衣ハしらぬまのしも
（地）
あらぬぞまくこさや。めれとこちなどちくふして
打こぞろくもくるしなれば。かくこまをともをず
（夕）
さ夜なるに友よびつるかりがもまうこそ吹
そふ萩の上風飛ましけるかれとしひつぐなて。
（おぎ）（ん）

文(大夫)の御前にかへりて、なげきがちなるも、御覧さめ
てやきこゆ給へんとつゝましく、こゝろき所(ヤ)のみ。
あいなく抱きづしうて、ひが御方にさく出て、御文
かきかへれど、小侍従にもえあひ給ひず、かれ(雲内)御かる
ざ所にもえいかず、むすつぶれて覚え給。(雲内ハ)女もるさは
がれ給しことのこゝちづしうて、我身やいかゞあ
らん。人やいかゞせんともあくあげしいれど。
あしうらうらげまて、打(雲内ノ女ゐうども)ふさ所なとさ(雲内ノ)と
ましともせひきあれ給ひざりかり。(地)まゝかうさも
がるべきことも、あげさゞなけるを、御うしろこ
だもいうじうあばめきゆれば、えことも、かまもし

語ゝず。おとゝあるびゝろ人やさるべきひまをもつくり
出しん。おとゝ君も今すこし抱ちるるさしのほど
まて。こゝいとくちおしうのこせふ。おとゝ。その
まゝに無り語りず。家をいとつくしとせひ男ゝ語。
小方にはかゝることなんと氣色もこをなり語りず。
こゝ大かたいとむつくしきれかしきまて。中家の
よそほひことまて無りゐへるゝ。女れの世中せひ
しめりて抱し語を。こゝろゞるしうむいくさる。
ようでさきなりて。こゝろやすくうちやすまをなしん。
さすがるこゝへ冷まのとさふしをゐふて。よるひる
おりしますめれば。あるゝ人ごもこゝろゆるびをび。

みやしうのことゞめがたきのみて。縁にまかせてさも
なほ猶。まれいと痛もゆかされぐさをおむつかりかりて。
うへはそふぐくはおぼしめしかゝせ。じゅしおそれむ
くへしのふづれぐりおぼされんを。雅君もろく
あそ。まろかはあそびあはせしかへ。家はおづけなり
かうあろやそされど。いとさくざりおはすける
人立まざりて。どのづゝけがらさもおもひあさ猶
まなりかなれどなんと思ひて。はならゝつへし思て
猶。家いとあへなしと覚して。ひとり抱をられしは。
あくありあてのら。いしきうじくしうこゝろばそ
かりしまうれしきこの君をそいけの限のかし

づきまれとせひて。明當をつけて。老のむつかしさも
なぐさめんとせひつれ。せひのみまへぐてありて
なげしなすもいくなんとさそしまへぐ。打(汲)しこ
まりて心(河)るあらずおもふとまへらくことはいしゥ
なんせふまへらくとぞうりさえさをしまなん。
かくへぐてせふまふことはいぐ。ゥまぐらん。内り
さふふ(うきぐんなす)が世中うしめしげまて。此ばまうぐ。ゆる。
いとつれぐまおもひてくれしさぐれだし。こゝろ
ぐりしうこ給ふなを。もろもはあそびつぎとまして。
なぐさめんとせひまへてなん。おしらさ内まもれ
し内とて。そぐこ人とおきをしまへ事をなろゥ

まはらもちひ四のしきもじと巳ゐへばりう（大文ん）おぼし
さらるされば、とゞめきてしゐふともおぼしゝへを
べきゆうろなるゐ、いとあらずくちおしうおぼ
されて、人（河）の心こそうき地いあれどくおきなるき心
だまも、我まへぞてくうとましゝりけりことよ、まるこ
さもこそいあしめ、おとゞ（は）の地のころをふうきり
ゐひなぐし、まれをゑんじてくゝゐてつくし給ふ。
りしこまて是よりうきろやすきゝともあしじと。
おなさつくの給おりしもくるぞ此（タ）東ゐへり、ゐし
いさゝかのひまもやと、此ごろいさげ給のめき給なり
なり、内のおとゞ（は）の此車のあれば、ころのをまくりし

ちなくて、やまとくられて、けが方まいりぬぬへ、
内の大夫の太郎、右か将か納言、兵衛佐、侍従、大夫など
いふも、これそこにはまいりけどひとれど、こゝとも
うちはゆるし給ひず、右衛門督、権中納言なども、こと
れもしなれど、右大臣の御ゆるしのまゝに、いふも
まりつゝうまつり給ことねんじなれど、その御子
どもくさ海ぐまりぬへど、この夕ほ御ゆるしはひ
なくこも、大夫の御ゆるしもなずひなくおぼ
しうなさゝこの雲内の君をぞけぢうらしきもれに
おぼしかしづきて、御ゆるしさけず、うけくしき
物におぼしまりつゝ、かくて、けうりぬひたまんが、

いとさうぐしきことをおぼす。(以河)あいまれほどうり
うちる系侍て。夕のるむ人に来り侍らんとて
出ぬ。(ん)いふひなきことをおぼしうるいひなして。
さてもやあらましとおぼきど。れいと心やすくれ
ど。(タ)人の御程のすくしまれくちくなりなんにうるを
なしぎうるして。その程心(タノ)ぞしのふきあけ乃。
ともむきをもこさぶめてゆうすともことさしなる
やうにもてなしてこそあらめせいしいさむとも。
一所にていおきなきに心のまゝにぐうしうこそ
あらめ。(大夫)宮もよもなかがらるせいしの給ことあらじ
とおぼきば。(こさぞん)女御の御つれぐうしとのけて。こそ

まもしらまもかいきりはいひなして。つゝしみ給や
なり。家のためにとて。おとゞこそ根もし給ひつめ。君は
さりとも心ざしのほどもしり給ひなん。うらみてえ
おへと宮のしのびまされば。いとおしげにひきつくろひ
てつくりなり。十四にならんかりしけうてるりは
えしのへど。いとこめりしきやうはうれしき
さ夜ふかまり。ゞらしさけなしず。明暮のまてあ
そび給ふさひ宮のしつれぞ。さりぐしくもあるべき
れ。殿もすくなまひの程まで此宵様などきこえけ
あじきなく。今をこそとひつれ。今さしはた程て
すいろひぬかや。いづちあらんとさへば。いとこそ哀

なれとてなさ給。姫（雲内心）君いはづしきことをおぼせば。
かみをまたげ給ひで。こゝになさまのゝなさ給。おとこ
君（タ）のれめれと。宰相の君いでゝそ。おなじ（宰相詞）君とこそ
これゝ罪しきをつれ。ゝちおしくいたしを給こと。
（以）夏ハことざ夏まおぼしなりことおもしますとも。
さやうまおぼしなびかを給なくどさくめさ聞しゆ
れば。いよく（雲内心）はづしとおぼして。抱もの給はず。
いで（大文詞）むつしきことなさそしられそ。人のれすくを
すくをのいとさぶめぐるくとの給いで（宰相詞）や抱ぐなしと。
あれづりきそしさを給まゝ侍めりし。さりともげま
ひぐ君（タ）や。人まをとりこさそしさをおしゆと。さそし

めしあはせよとぞ。なほ心やましきまゝにいふ。くまざの
君(タム)抱のうしろにいりぬてゝ給ふ。人のとがめんも
よろしき時にてくるしかりけれ。いと心ぼそくて。
涙をしのごひつゝあるしすゝかしきを。(タノ)めれといと
心づゝしうして。(大夫)家にとくゝきしこぼりて。夕ゆ
ゞの人のまゝひに。對面をさせぬくりかくるにもれ
そづしくむさつぶれて。抱もいとでなき給。(以夕詞)あとぐ乃
此心のいとつゝかれば。さぞられあまひやゝなんとお
もへど。忘しうあはきんこそつりなるべけれ。
などてすくしひまありぬべかりけり日ぞ。よそこ
へぞてつゝんとの給ふ由もいとつゝ哀げなれば

まろもさそはあらめとの給。忘(夕詞)しといはせしなん
やとのゐへばすうしうるづきおふき夜も。おさなげ
なり。れとれぶらまり。夜(以)まうでしまふけるひこち
こゝまひのゝしるれさきの声は。人ぐそぐやちど
おぢさはげぐいとおそろしと思して。けなくこさ給。
さもさもがれだとひろふるゆりし罪し給ちぞ。
れめれと来りて。もしめなるは。気色なきて。おれ心
づきちやげはこや。しきを給ちぬことはあらざり
なりとちふはいとつらく。いでやうりけり世かれ。
夜のおぼしの給ことはさしはも罪しず。大納言殿はし
いるまうを給へん。めてしらく北面の姫の。六位まくを

まとつづやくも日のきし日。こぐ此屏風のうしろ
こづ日きてなげくなりかり。おとこぞ我をば位なし
とてもしこなむりなりかりとおぼすは世中うら
めしかれば長もとてこしさしりこちしてめぐ面
しかれこしまへ

紅の泪にふかき袖の色をおさえどりとやい
ひしほかべきさしづくしとのぬへぐ

いろくに身のうきほどのしらくもいつ
深けり中の衣ぞ。どの給ひてぬに殿へぬ。かり
なくてつりぬぬ。おとこぞ君は立とかりこう心ちも
いと人ひろくしまさがりて。げがれまにしぬぬ。

川車（雲内）ころぢりまで遊びやうまいそぎ出ぬふ。
けさひを望も志げ心なければ（大文）こやのおまへより来
ぬへとあれど（タ）ねたるやうまでうぞきも志給なぞ。
なまぐのこゝにまゝ心がなげきあして霜（しく）のいと
志ろきまいそぎ出ぬふうちられたるまゝも人は
こえんがこづしたる（大文）女たるめしまけもすべか
めれば心やすきかまとていそぎ出給なりけり。君の
ほど人やるまゝず心ぼそくおもひつゞくるに兎の
氣色もいたうくもりて。まぐくしうりなる
（タ）宮氷うしてしすべる明ぐれの兎かきくし
ふる洞れ大夫（源地）まはこしとし女（せち）甚なるまゝふ何

だらりのれいそぎなるゝ○ど。ゞしたべのさうぞく
なぐらうぬぬとていそぎをさせぬふ。ひんぐし乃
院よハ。茶りの東の人ぐさうぞくをさせぬふ。(涼)夜まは
ちまのことぐも。中(秋好)宮よりもわらハしをげん乃
れうまぞえなしぞなれぬへりまゝし。逢又菖など
とまりしが。さうぐしうりしのまゝもとりそん。
人のこゝちもつゝよりもたれやうる。おもふべ
かやしなれバ。不ぐいどこそいどいくらうげを
のくし給ひそしあり。(雲ゐ)撥(ノまゝ)案ち納言。(北ノ方之)右衛門督。(冷)うへの
又菖まは。良清(うしきよ)今ハあふこのうゝまて。右中弁なり
なんなりける。(冷ノ)これとぐめさせぬて。宮づかへしべく

御覧ずべき年なれば娘をたてまつり給ふ源氏乃
舞姫は惟光朝臣のつのかみにて左京大夫かけたる娘な
かたちなどいとおかしげなる聞えあるをめす惟光いと
からひなれど大納言の外腹のむすめをたてまつらるなる
に朝臣のいつき娘いだしたてたらんなにのはぢかあ
らんべきとさへあるがわびておなじくは宮づかへやがて
せさすべく思ひおきてたり舞などならはしなどはさと
にていとようしたてゝかしづきなどしたしき身に
添ふべきはいみじうえりとゝのへて当日の夕つけて
参らせたり源の御かた〳〵のわらはしもづかへの
すぐれたるを御らんじくらべてえりいでらるゝ

心ちどもハほどくまつけて、いとおもしろくしげなり。
(体詞)れ前るめしてゆゑんだんうちなしまれ(二条院ノ)前をつゝ
らきてとさゞめぬふ。もいぐしもあらず。ちりぐなる
つゝべのやうざいうちをえしつゞひて、今一所の
れうをこれよりまらだやなどつゝひぬふ。(地)ぐまて
なしよういまよりてぞえしひまりけり。だがくの(タム)志ひ
ねのこゝろさがりて、おれなどもこゝいれられず。くりしつゝ
そて、文もよまでなぐめしめへるを心もやなぐさむ
と立出てまぎれありきぬふ。さ面うちハめでこくお
うしげてきづやうる面めいめへれば、つゝき如屑
などハいとおしとこゝをり。(坐)うへのれうるりも。

寺のまへにぞは物ちうもまてあるし給はずけが
此ころなるひいりまぬすまかあるけんうとく
しかれバぞぞちなどもけどをさ波かふまもれく
まぎれまいりたち給へるあるあり舞びめうしづさ
おろして此まどれまま屋風などそくかりそめれ
しのしひなりにやとしよりてのぞきたまへバ土やや
惟光が娘後ニタノ也ノ人敬門約と云ニ
ましけるてそひかしたり。たゞかれ人の所程と
えして。いますしそびやかまやうぞいなどのこと
さしびおかしき事はまさりてさへ也。ちうれぞ
こまやかまはえしまどほどれいとよくせひ出しらく
さ風にこころうけるとはちけれど。たゞまもあしで。

ぬのすそをひきなしまふ何ごろまるくあや
しとせる
タ
おめるますとうをかひ（ワイ）れ家べもけが心ざまて
しめをけすなかぶげがきのとのまゐぞうち（比）つけや
けり（惟光娘ム）ぴうりしき声なれど誰ともえしひなさ
れずな雨むつしきるけさうじそふとてさりぎ
つうしろこどもちうりてひとさはがしう
なれがいと（タム）口ありて立さり給ぬおさ紀の心やはし
かれば内へ来り給ことも事ず抱うかり給を文義な
ことつけて直衣（なをし）など雨かたれり文ゆりされて来
ふ。そびたるしきうちなり抱うしまぶきるおよす

けてざれありきぬふ。ぞうどよりもしめなりて。
そんしうさ面なべてなるぞ。せる先げしきは
おぼしなりぬ。箭のまいるぞしきは。いづれとも
なくこうぶくまになくしぬへると。舞姫のうち。
大夫のと。大納言夫とは。せぐれうとめぞのうち。
げまいとおしげなれど。そこしうけしげなる
ことは。れ大夫まはとよぶまじうりかり。地をまげま
い面めきて。その地ともこゝもまじうしてうち。梧桐
なとのきかうおしげなるとかうほめらるな
めり。例の舞姫どもよりはこれすくしおとなび
つゝげま心とならやしなり

(深 内裏)
夜(ふ)まりめてゆくんずるに、(ふ)おれめとまりめひし
(大武ノ娘ノ五節ノ)
をとめれまぐるを見しいげ、ふ川の日の暮川る
つゝ守れふこのうちやひやるべし
(深)
をとめ子も神さびぬし天川袖ふるきよの
(ふひ)
とも敷へぬれば、(か節ん)こし月の川もりをぞへて、(深ノ)うち
ばしけるまくの表を、思び給ひぬことのおりし
うばゆるもとるるしや
(か節)
かけていへばかふのことぞおもはゆれ日
かけの霜の袖にとけしもおをずりのうへよくとり
あへて、まぐさしたしかいろ、こずゑ、うすゞ、さう
がちにしらまぎこぞれるも、(深ん)人の程につけてハ

なりしとかんずゝなさぎれ志(タム)も人(惟光紙ニ)のめとまゐるまつけ
ても人しれずもひありきゐへどおろりちくごる
らをずいとけくしうまてなしこれど(タム)まれけく
ましき程の心にはなげかしうてやゝぬ(惟光紙ノ)ちりし
もいと心につきてつしき人(書ヌ)のなぐさめまも(ミ)な
けざしてんやとしふ(冷ノ)やがてこれとぐめさをゐひて
家づへすべきかゝ色ありなれど(ハ)ひさびはまうで
さきて(良法紙)を口のはうしきのさしへ(惟光紙)のうしもなる
もといどこてまうでぬ(書ヌ)大納言(ノまゝ又)もいとさしる氣しす
べきよしそうをさせゐふ(沙ノ男ヘ)左衛門督(ハ)そ人なるゐを生
まて(ハ)とぶめ有れど(ハ)これもとぐめさをゐふ(惟光)のうしへ

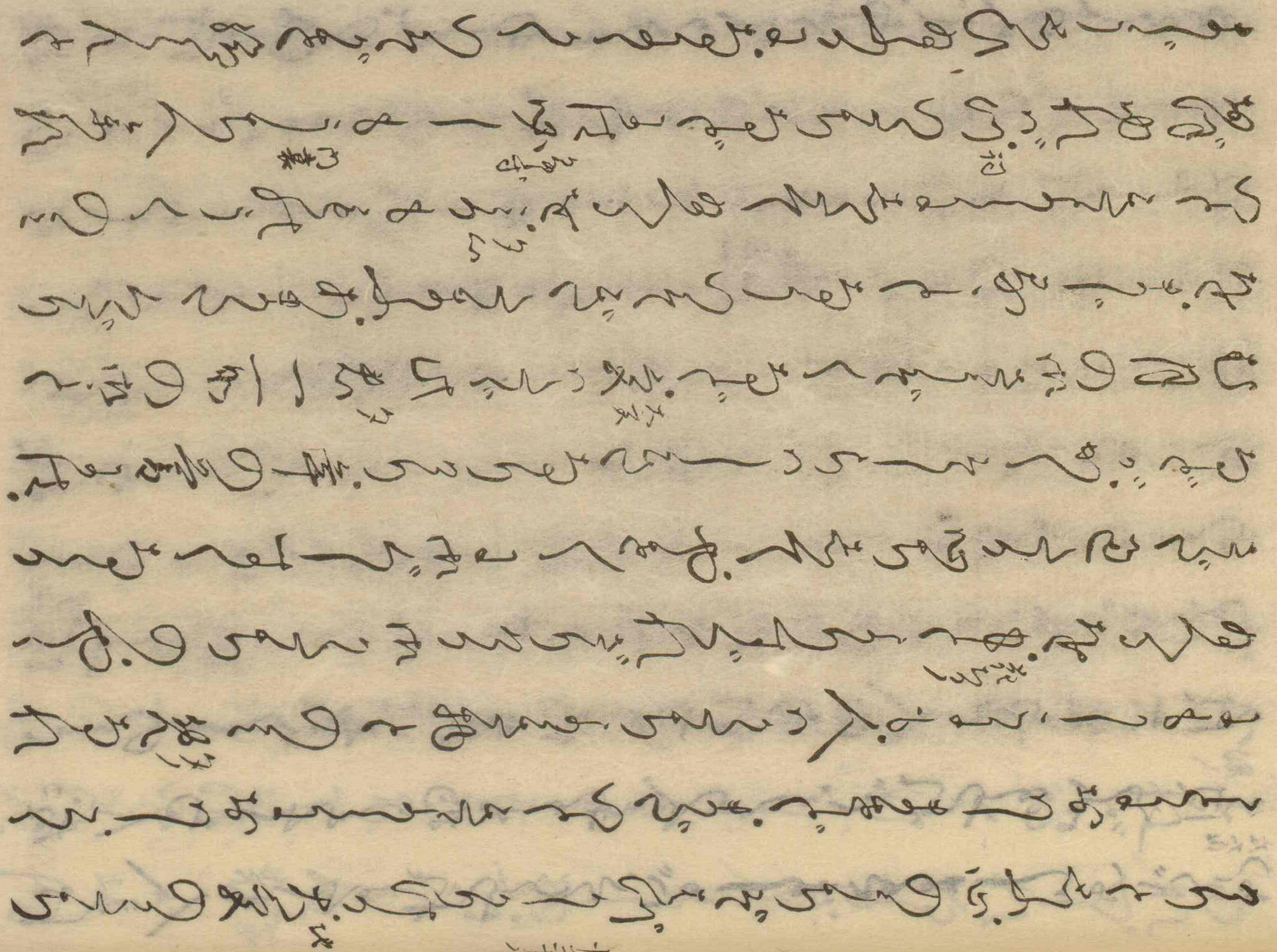
（惟光娘と）内侍のすけあきたるにと申させければ、さもやいた（源心）
はらましと、大殿（源）もおぼしたるを、かの人（夕心）はきゝて
いと口惜しと思ふ。わが年のほど、位など、かく物（抛）
げならずは、こひ見てまし物を、思ふ心ありと
だにしられでやみなむことゝ、わざとの事にはあらねど
うちそへて涙ぐまるゝおり〳〵あり。せう（惟光が子息）
（惟光之子兵衛尉と云人）とのわらはゝ殿上する、常にこの君にまいりつかう
まつるを、例（夕）よりもなつかしうかたらひ給ひて、
（惟光娘　夕霧）五節はいつかうちへはまいると問ひ給へば、ことしとこそは（兵衛尉詞）
聞侍れと申す。顔（夕霧）のいとよかりしかば、すゞろ
にこそ恋しけれ。まし（汝く）がつねに見るもうらやましきを

やましきをまゝにこゝにそんやとのゐへぞいりぞ（普濟詞）
さは侍らん心にまかせてもえこ侍らずをのこいら
うらとてちらくもらを侍しのばまりしていりぞ君
ぞにはあらんぞさせんとこそしも（夕詞）さらば文をぞ
とてこまへり（普濟心）さぐやうのことはいふ（むイ）まれをと
くるしかれど（をめて）給へばいとおしうてまていぬ
（比）年の程よりはざれてやありけん（惟光給ノ）おしとこそり
こどりのうすやうのこれましきかさのあるにこそ
まぎいとはかれどおひさきこそていとおしげに
日（夕）かげにもしかりかめやし女子（をとめこ）があまれそ
袖にかけし心にふかりこそ程にちゝ（惟光）ぬしふをより

きたり。おそ（狼と無濁心）りしうあきれて。えひきくさず。なそ（惟光詞）の
ふえぞとて。なに（とう）。おもて（狼と無濁）あらえてぬたり。よりしぬ（惟光詞）
けざしかりとうくめざし。きうとまがていくを。よび（惟光）
うきてたがぞとうへば。夜（源）のくもざれ（無濁詞）きこのしかく
の給てぬへりといへば。名所（惟光）なくうちゆえて。いつ（詞）
うけりしき志のれぞれ心なり。さんだらはあなど
としなれど。いつひなくとうなりなど給めて。
無志にもこそ。この志ざちのすくし人ぞまおぼし
ぬべかしましかば。おほぞうのうやげ人ようはい
なりてまし。夜（源）のれ心をきてとうに。こそめ給てん
人を。れ心とは志給（ヨすれ）まじきまこそいとこれもしかれ

ありしの入れのさめしまやなしましちどいへど
（始無濟）
えれいそぎさちまやり。れ人（タレム）はふるをどこまえや（雲ゐへ）
給ひず。こちまさうるのことし心まかりて。行
かうまゝにぴりなく逸しきおもかげにまゝあひ
こそでやとせふより外のことなし。（大家）家のれもとへも。
あひなく心うくて来り給ひず。（雲ゐノ）おりましうる。とし此
あそびなれし所のこゝ。さひ出しうくことまされば。
さとさへうくおぼし給ひ。まゝこもりぬ。（源）夏は
（東院夏ちの方ハ二条院ノ西ノ対ニ）
このうしの墓にぞ写しあづけ（タヒ）まりぬひけり。（源詞）大
文の此世の殘（のこり）すくちげなるをおはさずなりなん後も。
くおさなさ（ソノ）行よりこなしてうしろこおぼせと

かの人へが、ぶんの結ぶてのれころうて、あいけしう
哀まさひおうひなりのふぼのまちなど、こゝすう
まもくらのまほちなずもおもしけりくれ、うくれ
人なまん人いさひすて結いざりくりちなど、ウげあ
がちまつきさひとはれくらちをさこころまうけて
こひしとさふもおぢきちなや、心ばへのやうに
やりこくちらん人をえそ、おひせちめとおもふ。まうて
むゝひてこゝろくひちまうんもいとおもしげや、りくて
さん人のまひまされど、我のやうちまうれくらち。れ心しく
こゝろて代雨ゆふざくりのへぞてきしりうて、つゝ
なまくられとまてあし、まぶくしうのふめりも、むべなり



こきしのへぞ。などて（大文詞）うきもあらん。なひくげをれ
ふらん人のやうなもののふれとのくるまへだし。なひ（夕詞）
れどくげをれたる心ちぞするやとひさりごちて打
囲ぐらてぬのへり。かれ（大文心）ことをなまふなるんといと
心ぐるしうて。家（大文）もうちひそこのひぬ。なとこハくち（詞）
なしきこゝの人ぞる。心をさうしていうなれ。
あまりしめやかなくなまれしのひそ。何かのう
なぐめがちるしひいれのべさ。ゆくしうとののふ。何（夕詞）
ハ六位など人のあれづり侍めれば。しぞしのこと
ハしふのふれど。うちへ来るも抱うくてなん。なに
なとぐなりしまさましかば。こそふれまでも人まは

あれづれ侍らざらまし抱へざそぬ親(おや)ぬは
まれどいとけしうさしもあらぬてなげいたれば
(涙)おりしますあらりまさやすくも来なれ侍ぶ。ひん
がしの院までのこなんおまへちかく侍る。(花ちる)ぬいの乃れ
りこそ衣に抱しまへおや今一(芸)所おりしまさ
ましかばなまごとをしひ侍らましとて。泪のかつるを
後ぎらもしまへるそしきいうじう衣なるに。(大文ハ)ぶ文ハ
いとぐほろくと泣(なき)のひて。(羽)ちしまをくるく人ハ。
ほどくにつけて。されこそ衣なれど。をのげから
すくをくに人と吹たちぬれば。をろかにしふ人に
なさつぎなるを。しひいれぬさ海までを抱しまへご

おとゞの今出川殿しめ給へり。退なるさりげ
まつり。おほいとのとこそゆかしけれど。ちかくなりけれ
ちぬしとの御あたりにれ。御のおとゞのこゝろざしも。
すべての人はいはずと。世人もめでいふなれど。
昔よりもつことのこまかりゆくま。今なるさもう
うしろましおひさきとさきへさへりくいそうる
ても。世代せひさありきまへれば。ばしまんよろけ
うしめしさ世なるとぞ。なきさおりしますけいうち
まも太政いれわりさしなければ。のどやうすれ
おりまず。らしかくれおしくくとなるさえけるい
まへの例になるすしへて白馬ひさ。節会の日も。

うちのぞしき紙うけして芳のこめしよりもこと
そへて。いろしきれ有様なり。ときしぞれ廿余日。
朱雀院は此(冷ノ)輩あり。菅ざりはまぐ志き程なれど。
徐生(やよい)いこ(若つが)女の此忌(覚しき)月(つき)なり。とくひらぬころ様の
女もいとおもしろそれば。院(朱)はもれよういことる
つくろひこがくをおひ。此輩にけうまけ望ぬふ
上達ア。みこうちよりもじめ。心づひしおへり。人ぞ
これあを女は。ぢろうがきのをきぬふ。(冷)こうどそあう
色のれぞなれり。(冷ノ)めしありて(冷)おほきおとぐ(添)来こまふ。
おなじあらいろをきおへれど。いよくひとけもれと
うしやきてこえまがもを給。人ごのさうぞくようい。

つゐらうことなり。院(糸)もいとさかしこはねびまさしを
なかて。れさ海よういなる海めさしろうしる。すくまを
なへり。かふいつきとれ文人(もん)ものさず。こゝそれざえ
りこうしと字しころ学(がく)近(きう)十人をめす。或ゞの川りさ
の心この題(ざい)をなずしへて。れ題(ざい)なふ。大(ほ)夜の右(たらう)君(タ)
の心こなべきゆへなめり。おくぞうき物ぞい。物を
おげしず。川なゞぬ舟にのりて。池にもなれ出て。いと
すべなげや。日やうくぞうて。糸(ぐ)の舟どもこゞさま
ひて。調子(てうし)ぞそうする程の山風のひゞき。おもしろく
かきあまをこゝろに。ひとぞれ君(タム)はかうしくしこゝろち
ならでも。まじらひあそびぬべき物をと。世中うし

めしうおぼし給ひり。去(黄ウラブ)鶯鶴まゝはどまゝ芳の草志
えんの程見し出て。院(朱)のこゝかど又(訶)さばかりのこと
こそんやとの給ひするまつけて。その(ほん)世のこと衣ま
おぼしつゞけらるまひもろる程まおとゞ。院(朱)ありれ
うもしけ来りぬふ

(係)鶯のさえゞる春はむかしまてむかれし
金のうげぞうもれる。院(朱)のうへ

九(朱)重を霞へだつるまゝかまも去とけげくる
うぐひすの声。帥(そち)のこゝやとこゝろし今は兵(蛮)部つ
まて。今のさ(冷)まれうもしき事来りぬふ

(蛮)いまへをふきつゝへる箇行まさえゞる

鳥の者さへかりしぬ。おぎやかなそうしなし給
へる。よういことまめでこし。冷どしをめて
鶯の芳をしひてさえげるいまづこふもれの
色やあきこる。との給はするれありさ海。こよなく
ゆへくしくおりしさす。比それもれつくしざ海に。
うちくのことなれがあまるこまもながれずや。ぬに
さん。又かきおとしてげるまやあらん。栗前とをくて。
おぼつかなれば。冷ノおまへにはことぞもめす。蛍ノ宮
びも内のおとゞ和琴。さうのはこと。朱院のは前に
集て。琴さんは例のおほさ。添おとゞ海もりあふ。さう
つゝじさ。ゴ手のすぐれ。ゴ手のすぐれ。ゴ手づかひどもの。何

ほとて。いまはかくやうめかしきひはべるかのこともあれ
侍りけるをせうとくうしけるくはうおもしなりき
かくなんさしまさの世のこと堪ひ出しれ
侍りとうちなき給。さるべきれうげどもはをられ
侍て後。丞のけちめもせふかへりれぬさ。なふなん
なくさめ侍りぬる。まして世の中。みとゞも
さるべきやうなることでしなさきまかせて
ねど世の中のやうなとそうくてをなおもひたさ
また。給の秋はをりさはぞて。りうなう出ん。世を
うちなりぬべきれすくきは。なられめもれはなそとく
つあし人をさらむをはせて。源侍のうんのことゝもかど

やうなほどし出るに衰ぬることはほうり今をされ
べきなり風のうてにもほのめさ語ことしえざる
べし[恐]給はなほやけにそうきさせ語ことなる時ぞぞ
れさうがりのつきかうふりおまくれのことなり
ふれけれ心にかるもぬ時ぞ命ぬがくてかく事
世の業ところことやりかんさ夜ほもうかろげ浅
ばしむつりけり[恐ノ]老もておもすうまくに さがれ
さもまきりて[朱]おんもくんぐうしうえんぞくぞ
ちひきそしのひけりかくてだ学の[タ]恵その日のふと
うけくしうけくりのて[えんじ]進士にありのひぬ くしつを
わうかしこそ絶だとえくを語しかだ きうぐいの人

まづゝに三人ありけり。秋のけしきめしかりけるが
かうえて、浮俗は嫉みぬが凡人の心ゝはすゝ世
なけれど、村ぐのきもはまもりもて語もつ
なれば、まりありて、あどもこのめんし、庵をもどれ
きこえてこぞりうさりぬべきこゝろにて男のそばゞ
こゝに心ぐるしきは中なり。夜もすがらまつれさる庵
おもはずなりとひゐて、家あらてそうしこそ
坐つうき山里人などともけどん、すまきん乃れ
心つそ、六条京極わらりは。中どのみつゝくのほと
ある佐田なちをも見て、ゆへる語。我々が家あらん年そ
五十にありのひけるど。れ賢のつとゝいふ忠ゞ人

おぼしまうらるゝ。おとゝもげるゝしがらきこと
だおりと見して。さやうのれいそぎも。おるじらは
先づしりんれ家ゐまてと。いそがを給さし 源世四戈
しりてはまして。このれいそぎのこと。れさしれの
ことがく人舞人のさぎめるどと。れ心にへていと
なるゝ。理仏法事の目の。さうぞくろくだるどれ
なん。うへはいそがを給けり。ひんぐしの繞まも。
けて志ゐふことゞもあり。れなりしひまして。
やびうまきてかそして。なんをしゐひけり。世中
ひぐきゆすれりれいそぎなりと。或ハ心のこやまも
きそしめして。さし代世中まはあまの。きれ心なれど。

此ワラハをがあやまくまちまけなくことまふれて
もしこゝろあ。文(式ノ)ぐ(ノ)とも此よういなくこれもしきこと
のこゝ御ほうるゝ。ゆ(源ノ)しとせひ並こまふことこそ
もありけめと。いとおしくもうらくもおぼし
けりとかく(源ノ)あまこうくづひまへる人ぐ御ほうれ
中ま。さり(業を)ワきこゝろれせひまぐれて世まこゝろ
まつゝめでこゝきことま。せひかしげかれこまへるれ
すくをとぞ。我家まぞまほひこゝろどめいぼくり
おぼすま。まこうくこの世まあまるまぞひぐしいと
なこゝ給ハ。えらぬよもひの来のさりまもあるべき
かれとゞうろこびの代。小方(業ノまゝ田)ハ心ゆうず抱しとのこれ

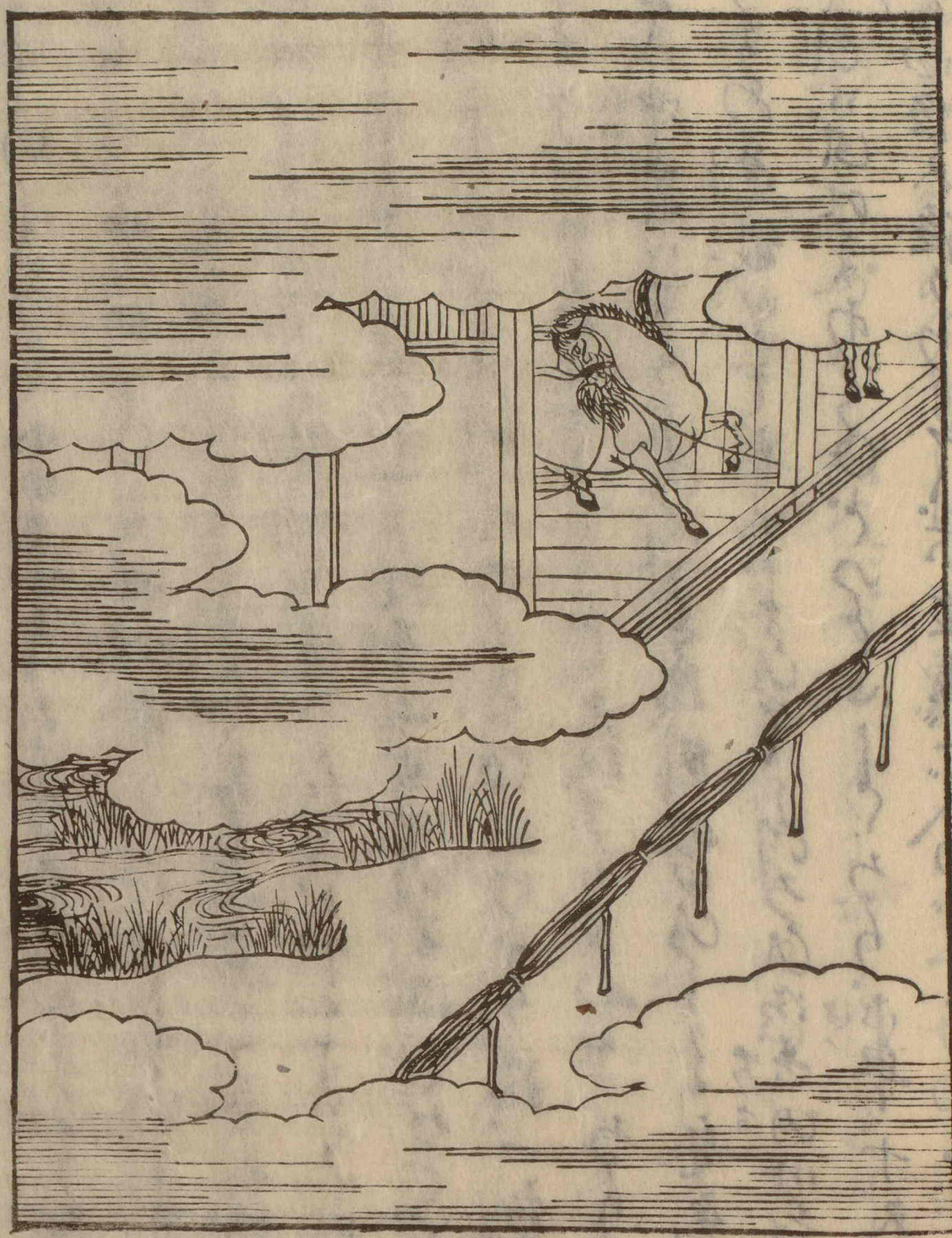
ばしたり。女れの（比 冷泉院女活）れまゝらひの程などにも。おとぐの
れよういなきやうなるをいよくうしめしとおもひ
たゝまへるなるべし。八月には六条院にくりもてく
（源ノ）けたりまふ。ひけじさうのまちは。中（秋好）宮のれふこや
なれば。やがておりしますべし。辰（ふミ）巳には。夏（源）のおり（紫ノ方ヘ）す
べきまちやうしとしは。ひんがしの院に住たまふ
基の（花ちる）れ方。いぬいのまちはあしの此方とおぼし
をきてさきまへり。もとありける池山をもびんなきさ
所なるをば。くげしかへて（こめイ）。水のともむき山のとき
てをあしらひて。樹ぐるれるぐの。れねがひの心ぐ
へをけんしをまへり。南（紫ノ方ヘ）ひんがしは。山多くうるの

茶のまま数をいくしてうへ池のさ夜おもしろくを
ぐれておまへちかき前栽(せんざい)に紫紅(こうごい)桜(さくら)櫻(かぢ)藤山吹(やまぶき)つ
つじなどやうの事のもてあそびをつぎとはうへ
で秋の前栽をいむしくほのくるまぞしろも

中(秋好)家のれまちなば、もとのやまゝ紅葉のいろこ
がつべきうへまどもとうへ、いづれ水とをくして
ましやつ水の春まさるべき宿をとてくるへ、
瀧(うき)おとして、秋の野をもとゝまりしうへ、そ乃
ころまあひて盛(さかり)まされこぶれたり、さぶれ大井の
りうりの野山むとくまけをされたる娘なり

花ちるの方へ
かのひんがしもすぐしげちる泉(ひぞこ)ありて、夜志
げるよわれまれまへちりき前栽、くれ行きたる風
すゞしうるべく、まぶうき森(もり)のやうなる木ども、
まぶくおもしろく山里めきて、卯花がさゝ○こと
さるしつゝてむしおぼゆる菅たち菅なぞ
しこさうびくるるなどやうのくれのくさぐ
をうへて、春雉の木草、その中にうちまぎらり

東おもてゝなて馬場(むまば)のおとゞけゝりらちゆひ
て八月のれおそび所まて水のほとりに葛蒲(さうぶ)う
へしけしきてむかひまゝやして世なるなき
じめどもをとゝのへそさせたまへ也



ましのまちに。小おもてつきかてこゝらまち
なりぺぞそのうきに。松のましげく。雪をもて
あそぶんこゝりてりしをこゝろ。冬のうしぬ。朝
霜のむすぶべき菊のまがき。まれハがれなるもそ
ぶし。おきくなるもしらぬ古山ずだの。すゞきなどを
うつしうへたり。ひがんのころほひつゝり給。一夜
まとこぶめさせ給しかど。さはがしきやうなり
とて。中宮ハすゞしのべさき給。例のおひらかに気色
ばまれ。菊散里ぞ。もゝ夜さひてこゝろひ給。雲のれ去
つゝひハ。ひびにあまひどいと心ことなり。水車十又
内前四位ハ位なりて。六位ハ上人などハ。うるぐさ

恨をえしをのへりこちらさき程にいあしず世のそし
里もやとたぶきのへれば、おまごとにおどろく志う
いろめしきといなし、今一寸のれ氣色も、おさくおと
し給いで、御道の私をひて、そなるにもてうしづさ
のへば、げまうもあるべきとも名をとこえ、
女房の曹司まちぞ、おてしくのこまげぞ、大方のと
よりもめでこうりけり、又六日ゐて、中宮まうでさせ
給、此れぞしきたる、さは、いへどいと所をし、れさいたいの
をぐれのへりけりをばさり抱まて、れ有様のさら語
まくをもりうるおりしまをば、世るおもくおもたれ
のへることすぐれてなんおりしましけり、このまゝち

まちの中のへだて三尺。へだてもなきがごとく
ゆきゝようして。げぢかくしろおもひはあさし
おくり九月になれば紅葉むらくとばそ。家のかきまへ
見もいはず面白し。風打吹ころ夕暮に流もここち
やるまがひの紅葉をこきまぜてごろもまなしき
あくり。初月をやうやう口くものごとおもしろしねきん
のおり袖かさねておもくちぢのうすきみかぜこいと
いそうなれてらうつゝ夜のそでもしを涙て糸。
うつしきながらあれど。けしきのかりしさとなん。
見知ぼし探ぎりける。さう両はさみしひあれさうれ。
までおし有さ夜ふまはまず。花ましうおうし。

十五上終

れまうそこにまゐ

秋好 心から春まけそのもけがやどれ紅葉を風乃
つてまゞまゝる。 紫ノ つきへぐ。れけりひもてもやす
さゝめどもおしれかへりれ。れもこのつるまゝけし
きいたほなどの心ぢへして。め 紫(えう)のえぐる

紫 風は散(ちる)紅葉ハかろし春の色を岩ねの松は
かけてこそこゝめ。 比 岩ゐの松もこゝ海かまれば。えちまれ
つくりことぐもあるかりかくさりあへずさりあるかゝ
ゆへくしきなどを。 秋好ノ おしくれしんぞ。れ(お)紫(まへ)姫(なる)人ぐも
かぞあへり。 源詞 おしくぐ比紅葉のれをうそこ。 紫ノ いとねらげ
あるかり。春の茶ざかりは。 比れいへ春里ゐへ。 比ば

紅葉をいひ、ゑさんは、毎つる姫のせちんことも、あ
をさしまぞこそて、茶の腹(げ)に立られてこそつらさ
ことは出こゝあと異しあも、いと(地)ワやりよけきをぬ
れ有様の、三家ぬ月りよ、いとゞせつやう姫れすまね
まて異しくよりし給、大ね(源山)の此(吟名)方はかうくゝぐ乃
れうつろひさゞまりて、ゞずなしぬ人はへけとちく
まぎらはさんと思して、神無月にちん後給けるれ
志けしひ、との有様をさらずしてつくしまり給、姫
君のれこゝあをぬげきば、大ゝのさほうもけぢ先
こゝちしぞ、いと抱くもてちさせ、南人の

69038
6 AP78